

～ライオン～

小 松 守

(秋田市大森山動物園～あきぎんオモリンの森～名誉園長)



ライオンは、学名*Panthera leo*、ヒョウ属の仲間であらと並ぶ大型ネコの一、日本では獅子と表すこともある。モンスーン気候帯の森林を中心に単独で生きるトラに対し、ライオンはサバンナの乾燥した草原で狩りをするため、幼獣時にあったヒョウ柄紋様を消し去り、枯草色に体色を変え、群れで狩りをするこで厳しい環境を生き抜いてきた優れたハンターだ。

西洋では強さの象徴として扱うことが多い。ライオンは多くの国章に登場するし、人と融合され神格化したスフィンクス像にもなっている。以前訪ねたパリ植物園内の動物園、猛獣舎入口を飾るレリーフにはライオンを生け捕りにし運び入れる様が描かれていたが、強いものをも捕獲できた自らの力を誇示したかったのか。

マーライオンがシンボリックな国際都市シンガポールの国章には西のライオンと東のトラが向き合っているが、他国と融合し、うまくやってゆく意識を表現しているようでもある。様々な場面に登場する百獣の王ライオンに人々は強さと共に何か威厳を感じ取ってきたのだろう。

さて、秋田の動物園でもライオンは千秋公園の児童動物園時代から現在まで、ずっと飼育され続けてきた大事な動物だ。ゾウやキリンのように、市民や来園者から特別な注目や関心を集めることはなかったが、いつも、どっしり、かつ静かに動物園に居ること動物園らしさを演出、見る人に特別な思いを与えてきたようだ。今回はライオンに関する思い出だ。

はじめは、秋田大学の元学長、故三浦亮先

生について。先生はライオンに特別な思い出があったそうだ。動物園好きの先生は「大森山動物園応援会」の初代会長でもあったが、学長時代に秋田大学で開催された「地方の動物園を考える」というシンポジウムの開会挨拶でライオンの思い出話をご披露、動物園を考える会に皆の心を誘ってくれた。

先生が秋田大学に赴任された頃、千秋公園の動物園を訪ねた時のお話であった。ライオンの檻に近づいた時、オスのライオンがにわかに立ち上がり、先生に尻を向け、おしっこを噴射してきた。おしっこをかけられた先生は、秋田に来て洗礼を受けたようだったとお話され、会場を沸かせた。

ライオンは自身のなわばり誇示のため排尿で「匂い付け」をする習性があるが、特に力ある存在が傍に来た時に反応するらしい。オスライオンは三浦先生にどこか力強さを感じたのかもしれない。この際、科学的なことは抜きの話である。

次は、大森山のライオン舎前で印象深い態度を見せてくれた紳士の思い出だ。私が園長になりたての頃、そこはまだライオンとチンパンジーの展示場が隣り合わせのような形となっていた、古い猛獣舎の時代だった。

平日の午前、開園直後でまだ入園者がほとんどいない中、私は日課の動物巡視のため事務所を出て猛獣たちの様子を順番に観て回っていた。やがてライオンの所に近づこうとしていた時、見慣れない光景に出会った。一人の紳士が腕を

組み、どこか真剣というか真顔でオスのライオンと向き合っていたのだ。平日の早い時間帯、立派な紳士が一人ライオンと対峙、これまで見たことがない光景だった。妙な感じが漂っていたが、危うい雰囲気を感じさせたわけではなかった。ライオンに特別な関心を持っているお客様なのだろうかと思うことにして、その場を後にした。一時間ほどの巡視を終え、事務所に戻ろうと思ったが、ライオン前の紳士が気に入り、再度猛獣舎に行ってみた。

なんと紳士はまだライオン前にいたのだ。今度は人止め柵にもたれかかり、どこかリラックスした態度で、穏やかに笑みを浮かべながらオスのライオンと何か話でもしているようにも見えた。邪魔をしてはいけないと距離を置きながら、紳士とライオンとの関わりから生まれた穏やかでやさしい雰囲気に、私もどこか癒されながら見ていたのかもしれない。

紳士は言葉にならない何かでオスライオンと対話しているようにも思えたし、それを感じ取ったライオンもどこか紳士の思いに敬意を払うかのように付き合ってくれていたのかもしれない。紳士とライオンの間には目には見えない特別な空気感があり、どこか通じ合っていたのかもしれない。私はそんな風景を傍観しながら、部外者として楽しませていただいた。

しばらくして自分が園職員であることを告げ、ライオン紳士にそっと言葉をかけてみた。

「ライオン、お好きのようですね」と。すると紳士は「大好きなんです。東京に出張し、帰りに時間があれば上野動物園のライオン前でこうしているんです」と。気を許した紳士は、私に名刺を差し出し、いろいろ話してくれた。秋田県南部にある小学校の校長先生であることもわかり、さらに話が弾んだ。ライオン紳士曰く、「動物と向き合っていると、子どもたちに伝えたい大事な何か、ふと浮かんで来たりもするんですよ。特にライオンといるとね…」

そのような話をしてくれたのを覚えている。

動物園では子どもが何かを感じたりすることはあるだろうが、大人ではそんな純心な世界とは無縁だろうと思っていたので、動物園人として恥ずかしくも思った。動物と向き合う時、動物園は不思議な空気の中、何かを感じさせてくれる場であると改めて思った。

後に私は大森山動物園のテーマ設定を考えることになるが、現在使っている「動物と語らう森」に行き着いたのは、この時の影響が大きかったとも言える。動物園は動物に何かを感じ、気づく場でもあり、人の生き方にも何か様々な思いを巡らせてくれる素敵な場であると改めて考えるようになった。

最後は大森山で仲良く生きたライオンのペア、レオとチャコの思い出だ。千秋公園から大森山にやってきた実に仲のいいペアだった。血気盛んなレオはチャコとの間にたくさんの子を設けた。一方のチャコはなぜか子育てが苦手、私たちは出産の度に園に寝泊まりしての人工哺育をしていた。お乳を出さないチャコはすぐ次の子を宿し出産、チャコはレオとの仲の良さと多産が話題になり、紙面にも取り上げられた。

だが、多産はチャコの身体に負担をかけていたのだろう。15歳半、人なら60歳くらいの年齢で乳がんが元で亡くなった。細かな経緯はともかく、連れ合いを無くしたレオは見た目にも落ち込みが激しく、元気を失い食欲も細くなり、1年半後、チャコの後を追うように亡くなった。

どこか擬人化された話のようだが、他の動物も仲間の死で行動に変化が生じることは知られている。レオにも何かしらの影響があったのは間違いない。群れ生きる動物、誰かと支え合い生きる人にも通じる話だろう。共に生きた相手を失った者が受ける影響は計り知れない。

人はライオンになぜか引き付けられてきた。だから動物園には不可欠だったのだろう。その訳はライオンの強さから放たれるオーラなのか。